

茶園からティーポットへ —トーマス・リプトンのイノベーション—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

両親がスコットランドで営む小さな食料品店がトーマス・リプトン（1848-1931）を商売の道へと導いた。家業を手伝っているうちに天性の商才が芽生え、15歳で単身渡米する。熾烈な競争社会で鍛えられたリプトンは帰国後、21歳でみずから食料品店を開業し、イギリス全土で着々と小売りネットワーク網を築いていく。

とくに彼が眼をつけた商品は紅茶だった。それまで紅茶は中流家庭以上の高価な飲み物で一般の労働者が口にすることはあまりなかった。貧しい家庭で生まれ育ったリプトンは誰でも気軽に紅茶が楽しめるように既存の流通システムを刷新する。紅茶ブームを巻き起こし、紅茶文化を創造し、紅茶の代名詞としてリプトンを世界的なブランドへ飛躍させた試みとはいかなるものだったのか。人々の生活様式を変えた歴史的イノベーションとして現代に甦らせる価値がある。

ユニークな宣伝で大評判

リプトンはスコットランドの商業都市グラスゴーで生まれた。アイルランドの農民だった両親は主食であるじゃがいもの飢饉で故郷を離れ、細々と食料品店を営んでいた。

幼い頃から商売を手伝い、仕入れた商品を港に取りに行くたびに海外に出て働きたいという夢が膨らんだ。両親の反対を押し切って13歳で蒸気

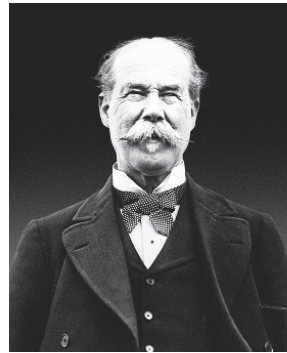
船のキャビンボーイとなり、渡航費を稼いで2年後にアメリカへ渡る。

ようやく着いた憧れのニューヨークは南北戦争の復員兵が押し寄せて仕事が見つからない。仕方なく南部へ移り、農園の運転手などをして懸命に働いた。3年後ニューヨークに戻ってデパートの食品売場の販売員となり、仕入れ、接客、宣伝などのノウハウを身につけて19歳で帰郷する。

しばらく家業を手伝っていたリプトンは1871年、21歳の誕生日にリプトン・マーケットと命名した自前の食料品店を開く。かつてないユニークな宣伝活動で店はたちまち繁盛した。

丸々と太った豚に「私は街一番の店リプトンへ行くところです」とキャッチコピーをつけ、街中を歩かせて話題をさらう。店頭には大きなハムを描いた看板を掲げ、暑い日にペンキがにじんで脂が乗ったようにおいしく見えると評判になった。

1号店が軌道に乗ると次々とチェーン展開し、新しい店がオープンするたびにみずからバンドを率いて華やかなパレードを繰り広げた。世界初の割引クーポン券も発行し、ハム、バター、卵などが格安で買えると人気を呼ぶ。



トーマス・リプトン

クリスマスには乳牛800頭から搾りとった6日分のミルクで巨大なチーズをつくり、金貨をたくさん入れて店頭飾ると飛ぶように売れた。警察から客が金貨を飲み込む恐れがあると注意されると、すぐに注意を促す新聞広告を出して逆に眼を惹いた。

さまざまな工夫で多店化戦略は成功し、約10年で20店舗を超えていた。

自力の一貫システムを確立

1880年代にリプトン・マーケットはイギリスの主要都市を網羅する規模に成長し、紅茶ディーラーが競って売り込みに来るようになった。安くても品質のよい紅茶を提供しようとリプトンは自力で商売する方法を模索する。

オリジナル・ブレンドの紅茶を開発するためにトップクラスのブレンドを雇い入れ、茶葉の品質を落とさずに相場の約半額で売り出した。販売方法も効率化し、注文に応じた量り売りから事前に計量してパッケージ化した袋売りに転換する。包装紙には品質やブレンド名を表示し、密封されているために鮮度もそのまま保てると好評だった。

品質には徹底的にこだわり、水質によって紅茶の風味も違ってくることから、地域ごとの水質にあわせてブレンドの配合を変えていった。「あなたの街の水にあわせた完璧なブレンドを」という謳い文句できめ細かな気配りが支持され、紅茶商としての名声を一気に高めていく。

1890年、現在のスリランカであるセイロン島を訪れ、視察後すぐにウバ州の広大な茶園を買取った。紅茶の栽培から販売まで一貫したシステムを構築するという壮大な目標を抱いていた。高地の急な斜面で茶摘みをする女性たちの負担を減らし、茶葉を安全に運搬するためにロープウェイを引き、首都コロomboに最新の設備によるブレンドとパッケージの工場を建設する。

輸出にあたって本社に印刷所を設け、20カ国語の広告を作成。リプトンは「宣伝のチャンスを決して逃すな。ただしその商品の品質がよいことが条件である」と口癖のように語っていた。

「茶園から直接ティーポットへ」という魅惑的

なキャッチフレーズでリプトン・ティーは世界中で愛飲されていく。アメリカでは卸売りの代理店を構え、小売店だけでなくホテルやレストランへと販路を拡大し、全米から注文が舞い込むようになる。日本にはじめて輸入された紅茶もリプトン製だった。

1894年に開かれた万国博覧会ではリプトンの紅茶が金賞に輝き、翌年からイギリス王室御用達の茶商に選ばれた。貧しい家庭の子供たちに多額の寄付をするなど慈善事業にも熱心で1898年にヴィクトリア女王からナイトの爵位を与えられ、サー・トーマス・リプトンと呼ばれるようになる。

夢を抱いた少年のように

私生活では50歳を過ぎてから世界的に有名なヨットレースであるアメリカズ・カップへの挑戦を開始した。夢と希望と不安を抱えながら遥かな海を超えてニューヨークをめざした少年の日を懐かしく思い出していたのかもしれない。

シャムロック号と名づけた愛艇に乗り込み、80歳で迎えた最後のレースまで5回チャレンジした。勝利することはできなかったものの、アメリカの市民から喝采され、ティファニー社製のゴールドカップを贈られた。

83歳になったリプトンはロンドン郊外の自宅で友人と夕食を楽しんだあと自分の部屋で倒れ、2日後にこの世を去る。生涯独身で子孫も財産も残さなかった。

遺体は生まれ故郷のグラスゴーの街はずれにある墓地に両親と共に埋葬された。ひとときわ高い墓碑のまわりはイギリスの夏の花エルダーフラワーで美しく彩られた。

スリランカのウバ州の茶園にはリプトンが建てたバンガローが当時の面影のまま残されている。大きな窓から扇状に広がった英国式庭園の彼方に緑の渓谷が霞んで見える。

毎朝10時頃になると山に深い霧がかかり、茶葉を包んでしっとり濡らす。それから40分ほど霧が晴れ、青空になり、強い陽射しで茶葉が乾いていく。リプトンもウバの紅茶を飲みながらおなじ風景を見ていた。